

科学的経験主義  
—論理実証主義とプラグマティズムの接点—

蟹池陽一  
(東京大学)

概要

本発表に於いては、1930年代のアメリカ哲学界における、論理実証主義とプラグマティズムの交流の状況を概観するが、とりわけ、カルナップやノイラートと共に、**International Encyclopedia of Unified Science** の編集者として、**Unity of Science** 運動に関わったモリスとカルナップとの関わりに焦点をあてる。モリスは、1930年代後半に著したいくつかの著作で、論理実証主義とデューイ、ミードらのプラグマティズムとを橋渡しするものとして、「科学的経験主義(**scientific empiricism**)」という立場を主張していた。これに対して、カルナップも、モリスの主張を、ある程度、受け入れていたと考えられる。このような両者の交流の背景には、**Unity of Science** 運動があったが、これは1945年のノイラートの死と共に、活力を失っていく。そして、1940年代以降は、両者はそれぞれ独自の道を歩むことになるが、1950年代末/1960年代初頭に至っても、両者は相互の立場が補完的なものであると考えていたようである。

他方、プラグマティズム自体は凋落の道を辿ったものの、その主張の一部であった自然主義は、アメリカの分析哲学の主要な潮流となるに至った。現代では、プラグマティズムと自然主義とは、しばしば論理実証主義とは対照的に捉えられがちであるが、1930年代には、そのようなことはなかったのであった。